

中大卒業50年

「ああ、中央に栄あれ」の 旗印の下で集い語り合う

白門40年会副会長 大泉清



創立20周年・卒業50周年記念式典・祝賀会 白門40年会

「白門40年会」は2015年に創立20周年・卒業50周年を迎えました。その記念式典・祝賀会が4月18日(土)、東京・新宿の京王プラザホテルで盛大に開催されました。

第1章 全員起立して校歌を斉唱

記念式典・祝賀会は午後3時から
の定時総会の後、京王プラザホテル
3階のグレースルームで始まった。
卒業50周年という記念の式典のため
に北海道や四国など全国各地から
123人が集まり、女性会員も十数人

が参加した。卒業して50年も経つから
女性陣も72歳を越えている。学部
や卒業後の人生は違っても“中大
卒業”というキーワードだけで時
空を超えて一気に50年前にタイム
スリップ。中大の仲間と会えるのは

うれしいものだ。この記事を読ん
でいる学生諸君も40年後、50年後には
きっと同じ思いになることを期待し
ている。それが、創立130年、伝統誇
る中大の絆である。

式典開始にあたり、まず全員が起
立して校歌斉唱。古希を過ぎたとい
え、歌詞を見ないで1番だけ歌い
切った。卒業して半世紀の時が流れ
たが、校歌を歌い始めると若かりし
頃を思い出す。我々が卒業した1965
年は東京オリンピックの後で、世の
中は高度経済成長に向かい出し就職

も売り手市場。夢を持って社会に飛び出した。金融、鉄鋼、自動車、造船など企業戦士として日本の高度経済成長を支えて行くことになった。

だが、好景気は長くは続かない、やがて、1993年バブルが崩壊して金融危機。日本は“失われた10年”に突入していくが、経験と知恵を生かしながら、昭和と平成の「光と影

を生き抜いてきた。

式典では学会会の久野修慈会長から「全国に55万人の学员(卒業生)がおり、中大の貴重な財産である。これからも同志愛で大学の発展に寄してもらいたい」との祝辞を頂いた。と同時に「40年会の会報が第1回支部会報コンテストで最優秀賞を受賞しました」とのうれしい報告もあっ

た。続いて大学の久野修慈常任理事から最近の学内事情を兼ねた祝辞。記念講演は40年会の会員である高村正彦自民党副総裁に「最近の内外情勢」と題して話してもらった。「安保法体制の整備は日米の同盟関係をさらに強固なものとし、日本の抑止力になる」との内容だったが、皆が真剣な表情で聞き入っていた。

第2章 中大は私学の雄である

記念祝賀会は場所を同ホテル5階のコンコルドボールルームCに移して午後5時10分から開始。冒頭に佐々木会長が「学生の未来に中大の将来がある。中大は私学の雄である」と力強く挨拶した。続いて酒井正三郎総長・学長と正野建樹学会会副会長から祝辞があり、三宅邦彦学会顧問(40年会会友)の乾杯の音頭でセレモニーは終了した。

特設ステージでは、中大音楽研究

会マンドリンクラブOB・OGからなるアンサンブル「トレモロ」の記念演奏が始まり、会場全体はパーティーモードに。宴が始まれば、もう学生気分。会場のあちこちで「今、何をやってんだ?」「お互い、元気でなにより」などの会話が飛び交った。筆者も卒業以来50年ぶりに会う寮の仲間もいた。そう、あれからもう50年経つのだ。ステージでは「サントワ・マミー」や「ラストダンスは私



酒井総長・学長が祝辞を述べた

に」といった60年代の懐かしい名曲が演奏され、青春のあの日、あの時を思い出させてくれる。

マンドリンの演奏が終われば、和服姿で謡曲や中大節を披露。全国各地から駆けつけた代々木寮の元寮生たちは集団で校歌を大合唱した。最後は来賓の方も含めて全員が立ち上がり、肩を組んで「惜別の歌」を熱唱。この歌を歌うと自然と皆の気持ちが一緒になってくる。40年会の仲間、50年を経てよくぞここに集まり、という実感を強く持った。

人生は最終コーナーを回ったが、まだまだ意気盛ん。「ああ、中大に栄あり」の気概を全員が新たに、記念祝賀会は終了した。



会場いっばいに輪になって歌った「惜別の歌」